

評判の悪い首長

ベザビ・ブラ殺害をめぐるさまざまな語り

増田 研

1 「西バンナには近づくな」

ピタ・ベザビの殺害について最初に教えてくれたのはアジス・アベバ大学のゲブレ・インティソ氏であった。そのとき私は調査地として選んだバンナについて事前に現地の情報を仕入れるべく、氏のオフィスを訪ねていたのである。

ゲブレ氏の話の要点は、バンナの首長であったベザビという男が1992年1月頃にカコという町で、兵士（あるいは警官）によって殺害された、その余波もあって地方政府のバンナに対する態度は硬化しているから調査にあたっては十分注意した方がよい、ということであった。これははじめてフィールドワークをしようという人間にとってはもちろん、そうでない人にとっても、まったく気の重くなるような話である。さらに当時アジス・アベバ大学の客員教授であったドイツ人の人類学者イヴォ・ストレッカーも、このベザビがかなりの厄介者であったこと、とりまきを連れて暴れ回っていたこと、彼の友人の商人がベザビによって殺されたことなどを話してくれ、死んだとはいえ、ベザビに近いところでの調査はしない方がいい、と忠告してくれた。

バンナはエチオピア南西部のオモ川の東に居住する農牧民である。その領域は大きく東西に二分され、それぞれに首長がいる。首長の位は世襲で、その存在は政治的な支配者というよりは、むしろ霊的な指導者といったものである。殺されたベザビは西バンナの首長（バンナ語ではピタ *bita* という）であった。

人々の話を総合して、事件のあらましを述べておこう。その日は月曜日で、カコの町は週一回のマーケットでにぎわっていた。一般にこうした小さな町では飲み屋や雑貨店はマーケットの日だけに仕事らしい仕事をする。この日もカコに数軒あったであろう飲み屋は、バンナの男たちでにぎわっていた。そこに数人のとりまきを伴ってベザビがやってくる。ひょっとするとベザビは、キリンやバッファローの尻尾の毛で飾りたてたカラシニコフを肩にかけていたかもしれない。

そこまではいつも通りの光景であった。いや、おそらくはちょっとした話の行き違いが小突きあい発展し、まわりが一時騒然となるところまではよくあることだったのだろう。だがこの日はそれではおさまらなかった。詳しい経緯は残念ながらよくわからない。だが、警官が発砲し、ベザビが血を流すやいなや、マーケットでにぎわう町が

大混乱に陥ったということだけは確かである。

2 「ベザビ? あいつはミンギだ」

1951年にドイツの民族学者イェンゼンがこの地を訪れた当時、西バンナの首長はベザビの父、ブラであった。確たる根拠はないがベザビがピタになったのは60年代の初頭、殺害された当時は60歳には届かないくらいであったろうと推測される。

一部の人はベザビのことを *eedi mingi* (ミンギの人) とよび、いかにトラブルの多い男であったかを強調する。ミンギとは禁忌に違反したこと、およびその状態をさす言葉だが、ベザビの場合、首長という特別に禁忌にとりまかれた地位にありながら常にそれを犯し続けたことが今日に至るまで人々の反感をかけている。現在ではベザビのたび重なる禁忌違反のさまざまな事例が、彼の死とその後の多くの災厄を説明するために引き合いに出されるのである。ベザビが殺された時期を1992年1月とすると、私が初めてバンナを訪れた93年3月はそれから一年あまりたったということになるが、それから私がバンナを去る94年3月までの間、私はベザビに関して一度たりとも良い評判を聞かなかった。

ベザビによるミンギの一例は以下のようなものである。

西バンナでは首長の成年式に用いる仔牛を、儀礼の終了後すぐに殺して食べてしまわなければならないと定めている。しかしベザビはその決まりを守らず、じきにそのウシはハイエナに食べられてしまった。このウシを殺さずにおいておくと首長はすぐ死んだり、あるいは病気がはやったり敵が来襲したりといった悪いことが起こるといわれており、ベザビが早死にしたことはそれを裏書きしたというのが今の人々の意見だ。

この仔牛はバンナの北西の山中のバルカというところ（ここはベザビの一族の母村とされている）から連れてくるのであるが、そのウシを受け取るさいの占いで「ベザビはすぐに死ぬ」という結果が出たという、まことしやかな噂も流れている。

もっとも、こういった説明を鵜呑みにするわけにはゆくまい。仔牛がハイエナに喰われたからベザビが死んだのではなく、順番としてはベザビが死んだあとでハイエナの一件が思い出され、因果関係についての説明が事後的に練り上げられた可能性も否定できないのである。だが、いずれにせよベザビの死は約束されていた、という語り口が横行していたのはたしかである。

霊的な指導者である首長は、槍やライフルといった武器を持ち歩いたり人を殺したりしてはならない。かつては盛んであった他民族への襲撃には、ピタは霊的な祝福を与えるというかたちでのみ参加し、決して武器を手には取らなかった。これに反してベザビは常にライフルを携行し、仲間(手下というべきか)と徒党を組んで次々と人を殺した。これは首長としてはもっとも重大な禁忌違反、すなわちミンギである。

このようなたび重なるミンギの結果は、やがて子孫にもおよぶであろうし、このままであればバンナは災厄に見舞われ続けるだろう。これにくわえてベザビは儀礼の遂行という役割をもすべて放棄したこと、持って生まれた霊的力を失い、祖先の怒りをかい、目を患い、結果的に自分の家で死ぬことができなかったのである。

人々が口にする、今は亡き首長の思い出はどれもこのようなものに終始する。

3 報復、そしてカコからの人口流出

ベザビの死をバンナ独自の法観念の中に位置づ

けたのはベザビの一族、すなわち西バンナの首長筋の一族である。バンナでは人が殺された場合、そのリネージ成員の誰かが報復に出向くという、いわゆる血讐の習慣（これはアロと呼ばれる）がある。殺害者は、報復を免れたければまずビタのところへ身を隠し、調停を願い出る。しかしベザビ殺害の場合、ベザビを殺した警官、あるいはその背景に控える力は国家権力に直結しており、バンナの法観念は一顧だにされない。なによりも、被害者はほかならぬ首長その人なのである。

この件に関しては、ベザビ殺害からほどなくして親族の男が報復に向かったが、逆に返り討ちにあってしまった。これもまたベザビの周囲の人々を刺激したにちがいない。そのあと送り込まれた男は、今度は警官一人を殺すのに成功している。この一連の報復劇が展開されたのち、カコの人口の大部分を占めていたアムハラやオロモといった北部からの移住者たちは、次なるバンナの来襲を恐れて20キロ離れたジンカの町（ここは州都でもある）へ大挙して移動してしまった。町の人々は平素からバンナを、殺人や暴力を意に介さない人間と見なして恐れを抱きながらも、微妙なバランスを保ちつつ、主にモノのやりとりを介した関係をつないできたのであるが、今回の事件はこのバランスを崩してしまったのである。

もともとカコは、この地域が19世紀末にエチオピア帝国に取り込まれたのちに、北部から移住してきた兵士とその家族たちの食糧をまかなうべく開墾された大規模な農場のための生産拠点として建設された町だとされている。一説によれば当初の入植者数は60名ほどで、南オモ地域に居住するすべての北部人たちの胃袋をまかなっていたともいわれる。カコはバンナの北限であるが、北部人たちが地土化して畑を耕すにあたって、これらの地元のバンナの人々が小作人（ゲッパール）となっ

ていった可能性は非常に高い。エチオピア南部において「町」という場合は、その設立の当初から政治的なヘゲモニーをはらんだ空間であったといえよう。

4 政治的弾圧？

マコネン・ドーレはバンナ出身者としてはただ一人、中央政界に乗り出した傑物である。彼は1991年以降の暫定政府で、一時期情報省の副大臣をも務めた人物だが、そのマコネンが南オモを視察したときのレポートが*Ethiopian Review*という雑誌に掲載されたことがある。この稿の要点は、中央の意向にお構いなしに南オモ地方の政治を牛耳っている地元の勢力のやりたい放題を告発するという点にあるのだが（彼はこの視察旅行の最中に相当な嫌がらせにあっているらしい）、その中でマコネンは、ベザビ殺害事件をこの地域における地方行政の非民主的な性格を象徴するものとして取りあげているのである。

実のところ、マコネンはベザビの父の弟にあたるので、その記述に何らかのバイアスがかかっていることは否めない。その中にはベザビが「不当な理由」で殺されたというくだりがあり（もっともその「不当な理由」の内容は書かれていないのだが）、彼が、ベザビの死を地域の政治権力による現地民の弾圧としてとらえているふしが見られる。

もちろん彼が告発する南部エチオピアの政治状況と、ビタ・ベザビの殺害とが直接にリンクすると断定する理由はない。むしろベザビの死を政治と結びつけようとするマコネンの論法はいささか強引で、証拠に乏しいだけによけい説得力に欠ける。地元の伝統的首長と、外来の政治勢力との関係という、いわば事件の遠い背景を考える糸口は彼によって与えられたが、それがどの程度までバ

ンナの人々にとって意味のあることであるかは判断し難い。バンナの人々もちろん、自分たちを支配する政治権力という漠然とした存在に気付いている。たとえばマーケットであるが、参加者の圧倒的多数はバンナの人々であるにも関わらず、マーケットの統制を行なうのは制服を着た警察官であるし、出店の場所も、真ん中に構えるのは北部人の商人で、バンナの人々は周辺部に密集しているのである。だがこのような状況にも関わらず、ベザビの一件に関して、復讐を企てた男たちの怒りはベザビを殺した警官個人にストレートに向けられてしまい、政治権力対バンナという構図を作り得なかった。

マコネンの視線と、当のバンナの人々との視線とは、重なるようで微妙にずれていると考えたほうがよい。少なくとも、マコネンはベザビのミンギについては一言も触れていない。

5 「ベザビのせいで干ばつになった」

ところで私が訪れた1993年の雨季はここ10年間なかったほどの深刻な雨不足で、極端に収穫が少なく、例年であればまだ食糧に余裕のある12月頃には食糧不足が深刻な問題になりはじめた。このことも一部ではベザビのミンギの余波として受け取られている。ベザビの親族の中でもそのような意見が多数を占めていると感じられたし、首長の儀礼の執行を代々手伝ってきたある長老も、近いうちに浄化のための儀礼を行なってベザビの問題を片づけなければならないと語っていた。

このような意見を耳にするとき興味深く感じる

のは、ベザビの問題児ぶりを語ることが、逆に霊的な指導者としての首長の理想像を裏面から照射し、再生産しているということである。言い方をかえれば、彼らの語りは内部の価値観へと向かっており、そこに政治的な力学を解釈の枠組みとしてとりこむ余地はほとんどない。

筆者がバンナの地に滞在していた当時、ベザビの遺体は死して2年近くたつというのに、まだ最終的な埋葬をされていなかった(通常、首長の遺体は特殊な手法で処理され、1~2年後にこれもまた手の込んだ方法で最終的に埋葬される)。首長はその強力な霊的力によって、死してのちもこの世界に影響力を及ぼすといわれる。むしろ生前の首長の仕事は、そのような歴代の首長の魂を慰撫することに費やされると考えたほうがいい。したがってミンギの状態で死んでしまったベザビが「ミンギの首長」のまま埋葬されるわけにいかない、というのが彼らなりの理屈である。またもし将来、ベザビのミンギが清祓され首長として埋葬されるに至ったとしても、歴代の首長たちの墓から離れたところになるだろうともいわれていた。

〔参考文献〕

Mekonen Dori, "Tsere chartermna tsere hizib tegbar" (「反憲章と反人民運動」), *Ethiopian Review*, October 1992, pp.49-50.

〔付記〕 アムハラ語の読み書きを不得手とする私のためにマコネンのレポートを日本語に訳してくれたのは東京大学の石原美奈子さんである。

(ますだ・けん/東京都立大学大学院)